

# 教育と伝道の使者 —S・R・ブラウン博士—

教養教育センター客員教授 中島耕二

## はじめに

昨今、明治学院では学院の創立者としてヘボン博士を単独で掲げる傾向にありますが、学院創設に貢献した人物として、本日紹介するS・R・ブラウン博士の名前を外すことはできません。ブラウン博士は滞日20年、その間教育と伝道の使者として日本の近代化に大きな足跡を残しました。博士の名はキリスト教界や明治学院内に止まらず、広く日本社会全体において記憶されてしかるべきと考えます。

## 1. 誕生から中国出発まで(1810年～1838年)

### (1) 生い立ち、会衆教会 (Congregational Church) に通う

サムエル・ロビンス・ブラウン(Samuel Robbins Brown) は、1810年6月16日、アメリカ・コネチカット州イースト・ウインザー (East Windsor, Connecticut)で、父テモシー・ヒル・ブラウン (Timothy Hill. Brown, 1782~1853)と母フィーベ・アレン・ヒンズデール・ブラウン(Phoebe Allen Hinesdale Brown, 1783 ~ 1861)の長男として生まれた。兄弟姉妹として姉と弟が一人ずつ、妹が二人いた。幼少のサムエルに感化を与えたのは母のフィーベであるが、彼女は2歳の時孤児となり、親戚の世話を受けながら文学や詩を愛する少女に育ち、18歳の時回心して会衆教会の信徒となった。やがて1805年6月、22歳でペンキ職 (handyman) に携わるテモシーと結婚した。サムエルは幼児期の3年間をイースト・ウインザーで過ごし、シュアベル・バートレット (Rev. Shubael Bartlett, 1778~1854) 牧師が牧会する村の会衆教会に母に手を引かれて通った。1813年11月1日、一家は生活に追われ新天地を求めて同州エリントン(Ellington)に移った。ここでエリザベスとメアリー (Mary C. 1813~1873) の二人の妹が生まれ、父も信仰を告白して会衆教会信徒となった。1818年、母のフィーベはこの地で、日本でも有名な「わずらわしき世をしばしのがれ」(『讃美歌』319番)を含め7曲の讃美歌の作詞をした。しかし、ブラウン一家はこの地でも生計に苦しむようになり、父テモシーは新たな収入源を求め、1818年、サムエルが8歳の時マサチューセッツ州マンソン (Monson, Massachusetts) に転居した。

### (2) 学校生活 (マンソン・アカデミー、アマースト大学、エール大学)

マンソンの町には州内でも屈指の大学進学校であるマンソン・アカデミーがあった。この学校は1804年に設立され、会衆教会の協力のもとにあったが、教会と宗教上の特別な関係はなかった。それでも伝道に関心を抱く生徒が数多く学び、1824年、14歳のサムエルもその一人に加わった。隣接の会衆教会 (Monson First Congregational Church) における日曜学校では、146人の生徒が通い「聖書、讃美歌および教理問答」の暗誦が宿題として課せられ、サムエルは聖書の750節を暗誦して二番の成績を残した。

サムエルは4年間の学業を終え、家計を助けるため臨時教員となり、収入の全額を父に渡した。



エール大学

やがて、将来伝道者になる夢を叶えるために、大学進学  
の希望を父に伝え、卒業後父の負債を肩代わりする  
ことを約束し、1828年の初夏会衆教会系のアマースト  
大学の入学試験を受けて合格した。学費を稼ぐため教  
師のアルバイトをして糊口を凌いでいたが、やがて、  
ニューヘブンに住む母の友人が、サムエルの学資の援  
助を申し出てくれ、サムエルはアマースト大学からコ  
ネチカット州ニューヘブンのエール大学に転校するこ  
とになった。アマースト大学は新島襄、内村鑑三、神

田乃武などが学んだ大学として知られている。サムエルはエール大学の第一学年に入学したが、学  
費を得るため、一、二年目は森に入って暖房用の薪の切り出しや音楽クラスで得意の声乐と器楽の  
指導をし、また学生食堂の給仕等に励み、三年次は寄宿舎の朝の鐘をたたき起床係に指名されて報  
酬を得、四年次はニューヘブンの男子校で音楽講師を勤め学費の全額を賄った。卒業の3ヶ月前の  
休暇には、ニューヨーク市の聾啞学校(The New York School of the Deaf)から招かれて講師を務めた。  
ちなみに卒業論文は「指話法」についてであった。サムエルはニューヘブンで多くの良き友人  
を得て、1832年にエール大学を卒業した。

ここまでのサムエルの成長過程を見ると、母から信仰心を吸収し、聖書と讃美歌から霊的な感性  
を授かりほほ笑みを絶やさず、父からは貧しくとも真摯に努力することを学び、加えて長男として  
の義理堅さと独立心を持った青年に育ったことが分かる。加えてサムエルはユーモアも持ち合わせ  
ていた。

### (3) ニューヨーク聾啞学校教師、南カロライナ州コロンビア神学校入学

大学卒業後は神学校への進学も考えたが、父との約束があり、また神学を学び福音伝道者を目指  
すには社会的経験が足りないと自覚し、聾啞学校の教師を続けることにした。3年間この学校に勤  
め父との約束を果たした頃、ひどい急性肺炎にかかり療養のため南カロライナ州コロンビアに移り、  
この機会に同地の長老教会が経営するコロンビア神学校に入学した。学費は同町の女学校で声乐と  
器楽を教えて確保した。この学校の教え子にのちにアメリカ聖公会初代中国主教になったブーン師夫  
人や第26代アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの母となったミス・マーサ・ブロック (Martha  
Stewart Bulloch) などがいた。

### (4) ニューヨーク市ユニオン神学校へ転校、マンハッタン・アレン通り長老教会信徒

健康を取り戻したサムエルは、ニューヨーク聾啞学校から良い条件で教師のオファーが届いたこ  
ともあり、1836年再びニューヨークへ戻り、まだ創立して間もないユニオン神学校に転入した。こ

の神学校は長老教会系ではあったが、設立発起人の多くはニューヨークのクリスチャン実業家たちという特徴を持ち、この思想はサムエルに実業家たちを伝道の協力者として親近感を抱かせることになった。サムエルは5番街の聾啞学校で教えながら神学を学び、アーレン通り長老教会（Allen Street Presbyterian Church）の会員となり、その合唱隊の指導を熱心に続けた。

## 2. 中国伝道時代(1838年～1847年)

### (1)結婚、按手礼受領、マカオ・モリソン記念学校校長就任

1834年8月1日に初代中国プロテスタント宣教師のロバート・モリソンが亡くなると、在中国（清）のアメリカ人クリスチャン商人たちが彼の遺徳を偲び、マカオに「モリソン教育協会」を設立し、中国人青少年にキリスト教にもとづく学校を建てることを計画した。1838年10月、資金の準備も出来、商人の代表は校長の推薦をエール大学の3人の教授に依頼した。10月4日同大学の卒業生であるサムエルに白羽の矢が立った。ところが、中国に向かう「モリソン号」は、同月16日にニューヨーク港を出航することが決まっていた。サムエルは12日間のうちにオファー受諾の可否と諸々の準備を整える必要があった。早速、生まれ故郷のイースト・ウインザーにバートレット牧師を訪ね、その娘である婚約者のエリザベスに地の果てまで一緒に行ってくれるかどうかを確認し、同意を得ると聾啞学校に辞職願いを提出し、10月10日にはエリザベスと結婚式を挙げ、14日にアーレン通り長老教会で按手礼を受領し、17日の朝アメリカン・ボードの宣教師として、モリソン号の船上の人となった。

モリソン号は喜望峰を回り、125日の航海の末、1839年2月18日にマカオ沖に到着し、翌朝、在中国のアメリカン・ボード宣教師S・W・ウィリアムスの出迎えを受けた。しかし、当時の清はアヘンと外国人女性の入国は禁止していたので、エリザベスはサムエルの手荷物という方便によってようやく入国が認められた。ブラウン夫妻の到着は、モリソン教育協会会長のリオネル・デントから大歓迎を受け、早速秋からギッツラフ宣教師の持家を夫妻の住居兼校舎として借り受け、「モリソン記念学校」が開校となった。生徒は6人、寄宿舍と衣類が支給され授業料も無償であった。

### (2)香港、帰国、中国人青年3人を同行

サムエルは午前中に中国語を学び、午後と夕方に英語を教えた。生徒たちは音楽に興味を示し、サムエルも音楽が靈感を与え心の安定に効果があるとして、積極的に英語で讃美歌を教えた。また、生徒用に英語教科書を自ら編集した。1840年2月18日、待望の長女が生まれJulia Mariaと名付けた。1841年に夫妻は7週間のシンガポール旅行に出かけ、同地で着任したばかりのアメリカ長老教会宣教師のヘボン夫妻と出会った。のちに二人は偶然、日本で20年間同僚として協働することになる。やがてサムエルと生徒たちは心を通わせるようになり、生徒たちはサムエルの母フィーベにまで手紙を書くようになった。1842年6月頃には生徒の数も16人に増えた。

アヘン戦争の結果、香港がイギリスに譲渡されると香港提督は、モリソン教育協会に香港のモリソン丘に新しい校舎を建てるべく土地を提供した。デント会長がこれに応え、3,000ドルを寄付し、同年11月1日に学校はマカオから香港の新校舎に移転した。この地で長男のRobert Morrisonが誕生した。

学校は1844年3月の時点で生徒数28名、寄宿舎費、食事それに授業料が無償であった。

ある日、学校を海賊が襲いサムエルは彼らの持つ槍で腕を刺され重傷を負った。海賊が学校内を物色している間、生徒、夫人や子供たちはニワトリ小屋に隠れ難を逃れた。こうした不安もあったが、サムエルは長く中国に止まって奉仕することを決意していた。ところが、1846年にエリザベスが第三子を出産しその子は間もなく召天、その後、俄かにエリザベスの健康が悪化して、遂に一家はアメリカに帰国せざるを得ない状況となった。

### 3. アメリカ帰国から日本出発まで(1847年～1859年)

#### (1) ローム・アカデミー校長、オワスコアウトレット改革教会牧師

ブラウン一家は1846年の冬香港を出航し、インド洋から喜望峰を回り翌年4月ニューヨークの港に着いた。この時、サムエルは教え子の黄勝（のち在米清国領事）、黄寛（のち外科医）および容閑（のち在米清国公使）の三人をアメリカに同行したが、彼らは一様にエリザベスのそれまでの親切に感謝と尊敬を示した。一行はニューヨークに滞在後、すぐにマンソンに向かった。留学生たちはマンソン・アカデミーに入学し、サムエルは牧師の職探しをはじめたが、1848年にニューヨーク州ローム（Rome）で、私立アカデミーの校長に招聘され一家は留学生を伴ない新任地に移った。学校は男女共学で初年度には310名の生徒を集めた。やがて、校舎も増築され600名を超す生徒が学ぶまでに発展した。しかし、サムエルは学校運営に満足できなくなり、1851年3月31日に校長を辞任した。

#### (2) オワスコレット教会とフルベッキ、アドリアンス、マニオン、キダーたち

程なくして、サムエルにサンドビーチ・オランダ改革教会から牧師の誘いがあり、彼はこれに応じた。サムエルは牧師のかたわら家族の生活を支えるため70エーカー（8万4千坪・・・横浜キャンパスの1.4倍）の農地を購入し、そこに大きな家を建て25名を定員とする寄宿学校を開いた。1853年12月29日に父が亡くなり、母フューベはサムエル一家と暮らすようになった。教会はサムエルの努力で復興し、教会員の中から海外伝道を希望する女性たちが生まれた。キャロライン・アドリアンス（最初の来日女性宣教師）、メアリー・エディー・キダー（フェリス女学院創立者）それにマリア・マンヨン（フルベッキ宣教師夫人）たちである。フルベッキも1856年にオーバン神学校に入学し、サンドビーチ教会で奉仕活動に従事し、サムエルから多くを学ぶ機会を得た。サムエルは教会のため世俗的な集会にも積極的に参加した。こうしたサムエルそしてエリザベスの婦人会の奮闘によって、サンドビーチ教会は1859年には、礼拝出席者260名、陪餐会員120名、日曜学校生徒130名に増加した。サムエルはまた、女子の高等教育機関の設立に努力し、自ら委員長として奉仕し、1855年

4月に大学名称を「エルマイラ女子大学」として、女子大学設立を果たした。アメリカ最初の認可女子大学の発足であった。

#### 4. 来日から第一回帰国まで(1859年～1867年)

##### (1)アメリカ・オランダ改革教会宣教師として出発(1859年)

サムエルは中国から帰国後も中国の仕事に早く復帰したいという希望を抱いていたが、妻のエリザベスの健康がそれを許さなかった。そして、ペリーとハリスの努力によって日本への宣教師の派遣が可能となると、サムエルの開拓者精神と伝道精神が動き出し、1858年12月11日に中国でも日本でもどちらでも可能とし、「わたしが海外にゆくことは、ここにとどまっているより教会のためになる」と所属するオランダ改革教会海外伝道局に志願書を送付した。シモンズ夫妻とフルベッキ夫妻とともに日本派遣が決まると、サムエルはニューブランズウィック神学校を訪ね講演を行い、海外伝道を希望する神学生を鼓舞した。この中に、のちに同僚宣教師となるJ・H・バラがいたことは良く知られている。1858年5月7日、サムエルは妻、二人の娘と次男を伴ない、シモンズ、フルベッキ家族らとサープライズ号に乗り込みニューヨーク港を後にした。インド洋を横切りジャワに寄港し、香港、上海で旧友たちと再会し、宣教師家族はひとまず同地に残り、一行はメリー・ルイザ号で日本に向かった。11月1日遂に神奈川に到着し、ヘボン博士の計らいで成仏寺の庫裏に旅装を解いた。

##### (2)神奈川成仏寺、『日英会話篇』の編集

1860年3月6日、総領事のハリスから招かれて神奈川領事のドールと初めて江戸を訪ねた。サムエルは日本語教師の斡旋を依頼した。時は尊王攘夷運動のさ中でもあり、ハリスは宣教師の安全を考え、サムエルを公使館付き牧師に任命し、ヘボン博士も同様に公使館付き医師に任命された。3月11日の主日には再びアメリカ公使館に呼ばれ礼拝の司式を行った。成仏寺ではサムエルの奉仕によって、ヘボン夫妻をはじめ横浜の英米人を加えて日曜日ごとに礼拝が捧げられた。語学にも秀でたサムエルは来日以来『日英会話篇』という大部の教科書の編集を進めていた。この著作は1863年に上海の美華書館で印刷されたが、その費用は横浜のスコットランド商人から、そしてサムエルの横浜・上海往復の船賃はユダヤ人紳士から無償で提供された。やがて、幕府から安全のため神奈川を去って横浜居留地に移るよう督促が寄せられた。しかし、オランダ改革教会では南北戦争の影響で献金が減り、居留地の土地を借りる予算がなかった。その時、横浜の英米紳士24名から、サムエルの礼拝奉仕への感謝として妻のエリザベス宛てに多額の支援金の申し出が寄せられ、伝道局の窮状を救った。1861年10月10日、最愛の母ヒューベが本国でなくなった。78歳であった。

##### (3)横浜英学所、聖書翻訳開始、切支丹禁制の高札撤去の努力、横浜居留地自宅の焼失

1862年、神奈川奉行所は運上所の役人その子弟の英学教育の学校を開き、在横浜の宣教師に講師



ニューヨーク市立大学

を依頼してきた。宣教師たちは日本人青年たちとの接触の場となることからこれを引き受けた。アメリカ・オランダ改革教会からサムエル、J・H・バラ夫妻、アメリカ長老教会からヘボン博士夫妻、タムソンが教師を務めたが、これは改革・長老教会の協働の教育事業となり、謂わば明治学院のプロト・タイプでもあった。学生として、大鳥圭介（学習院長、貴族院議員）、谷田部良吉（東大教授）、星 亨（逓信大臣、衆議院議長）、安藤太郎（ハワイ総領事）、塚原周造（東京商船学校長）、粟津高明（海軍兵学寮教授）、高松凌雲（医師）、三宅秀（東大初代医学部長）、益田 孝（三井物産創設

者）等が学んだ。学校は1866年火事で校舎を焼失し、財政難のため間もなく廃校となった。

サムエルは来日後早くから聖書の翻訳を進めていたが、1863年には四福音書と創世紀の和訳をほぼ終了した。政局は年ごとに尊王攘夷運動が高まり騒然とする中で、サムエルはいち早く信教の自由を求めて、幕府の切支丹禁制の高札撤去に努力することを誓い、その声明書を欧米各国の福音同盟会に発送した。サムエルは世俗世界にも強い関心を持っていた。

1867年5月、横浜の大火（豚屋火事）によって、サムエルの自宅が全焼し聖書の翻訳原稿も焼失した。幸いマタイ伝とマルコ伝は友人に貸し出していて焼失を免れたが、家と研究書籍全てを失ったことから、本国に帰る決心をした。この頃、ニューヨーク市立大学は、サムエルに神学博士号を贈ることを決定していた。

## 5. アメリカ帰国と再来日(1867年～1869年)

アメリカに戻っても、帰国宣教師には中々働き口がなく、サムエルは再び日本派遣を伝道局に申し入れた。1869年1月15日付けで長女ジュリアの夫で、イギリス新潟領事を務めるJ・C・ラウダーから新潟英学校教師の誘いの手紙が届いた。年俸3,000ドル、渡航費支給の条件であった。幸い伝道局の許可が降り、その時伝道局から初代女性宣教師として派遣されたミス・メアリー・キダーを伴ない、7月末夫妻は再び日本に向け出発した。今回は大陸横断鉄道と太平洋航路により、8月26日に横浜に到着した。

## 6. 再来日から帰国まで(1869年～1879年)

### (1)新潟英学校、横浜修文館における英語教育

1869年10月6日、新潟英学校赴任のためキダーを伴って、横浜を出発した。途中安中で新島襄の父親と会見した。新潟英学校ではキリスト教を教えたことにより問題となり、翌年6月に辞任し、

生徒の真木重遠を連れて横浜に戻り山手211番に自宅を構えた。9月11日から3年契約で神奈川県立修文館の教師となった。生徒には、真木重遠（上田教会牧師）、吉原重俊（初代日銀総裁）、小野梓（自由民権家、早稲田大学創立者）、中浜東一郎（東京衛生研究所長）、都築馨六（外務次官、枢密顧問官）、前田利嗣（旧金沢藩主）、松平定敬（旧桑名藩主）、松平定教（旧桑名藩主）、駒井重格（東京高商校長、専修大学設立）、諏訪頼敏（専修学校塾監）、川俣英夫（烏山藩、教育者）、大関増勤（旧黒羽藩主）、佐久間信恭（札幌農学校三期生、英学者、五高教授）、佐藤昌介（札幌農学校一期生、北大総長）、宮部金吾（札幌農学校二期生、北大教授）、植村正久（明治学院教授、富士見町教会牧師）、押川方義（東北学院長）、井深梶之助（麹町教会牧師、明治学院総理）、白石直治（東大教授、土木学会会長、関西鉄道社長）等俊秀が集まり、サムエルの教えを受けた。

## (2)横浜ユニオン・チャーチ、日本基督公会設立への尽力

修文館での井深梶之助との出会いは神の采配であった。苦学を続ける優秀な学生を思うサムエルの心情は、かつての自分の投影であった。井深とサムエルは深い師弟の関係で結ばれた。やがて井深は恩師から洗礼を授かり、サムエル、J・H・バラたちの指導によって設立された日本基督公会（横浜海岸教会）の信徒となった。

## (3)ブラウン塾開設、東京一致神学校（のちの明治学院神学部）開校

1873年8月、修文館との契約が切れ、条件が合わず更新をしなかった。アメリカ留学を目指す旧桑名藩主松平定教はサムエルの指導継続を嘆願し、その交渉を井深梶之助に託した。井深は避暑先の箱根にサムエル訪ね、私塾の開設を依頼した。授業料一人月額10円を条件にサムエルは松平の希望を呑んだ。

秋からブラウン塾が始まった。生徒には、松平定教、駒井重格、諏訪頼敏、白石直治、島田三郎（衆議院議長）、前田利嗣、植村正久、押川方義、井深梶之助、本多庸一（牧師、青山学院長）、柳本通義（札幌農学校一期生）、藤生金六（自由民権家、牧師）、雨森秋成（教育者・事業家）、山本秀煌（牧師、明治学院教授）等旧修文館の生徒に加え、神学を目指す生徒が集まった。塾は次女のハティと姪のハリエット・ウインも手伝い、やがてミラーやアメルマンたち宣教師が指導し、英学一般から神学教育に中心が移っていった。そして、1877（明治10）年10月7日に、築地居留地に東京一致神学校が開校し、ブラウン塾の神学生は同校に転校していった。

サムエルは1878年に旧約聖書和訳委員会が組織されると、委員に選ばれたが体調が悪化したため、遂に帰国を決意した。

## 7. 帰国後から永眠まで（1879年～1880年）

サムエルが帰国後の1880年、新約聖書全訳完成記念式が築地新栄教会で行われた。6月、エール

大学の同窓会に出席し、19日には故郷のモンソンに出かけ、両親の墓参を行った。翌20日、エール大学時代親友であった同級生宅に未亡人を訪問中急逝した。享年70歳と4日であった。その生涯は世界の教育と伝道に捧げられたものであった。